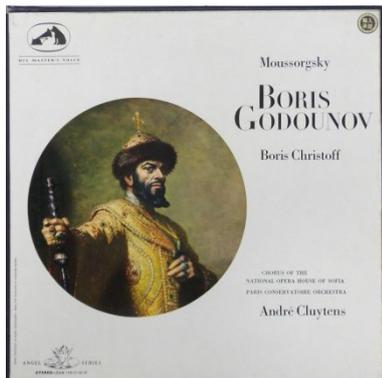


＜今週のお宝盤＞

受付期限：2026年4月15日

第9103番 クリュイタンスのボリス・ゴドノフ



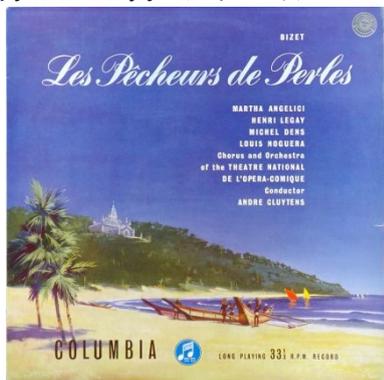
B.ゴドノフ、ピーメン、ヴァルラーム
ボリス・クリストフ（Bs）
クセーニャ ゲオルゲヴァ（S）
フョードル アレクセーヴァ（M）
シュイスキー ラニガン（T）
ディミトリー ウズノフ（T）
パリ音楽院管／クリュイタンス
ソフィア国立歌劇場合唱団

税込26400円

英EMI／SAN110-3／4枚組／1963年録音／ステレオ／G

深い地の底から響いてくるようなバスを期待するならレイゼンやペトロフを聴いた方がいい。クリストフの声は洗練されていてロシア臭は無い。ブルガリア出身の彼はイタリアで修業を積んだ後、デビューは『ラ・ボエーム』のコリーネ役だった。レコードで聴く“フィリッポ2世”は今でも彼に敵うものはないだろう。鉄のカーテンの時代、彼のボリスを聴きたいのは至極当たり前のことで、ロンドンでセンセーショナルな成功を収め、EMIは早速フランス国立放送の協力を得てモノラル録音をした。クリストフの人気は高まる一方で、十年後フランス政府からの要望で再録音されたのがこのレコードである。4枚組ながらたちまちベストセラーとなり、8年後にギャウロフと言う名歌手を得たカラヤンがデッキに録音するまでは独壇場だった。クリストフの声は真剣に耳を傾ける者を決して裏切らない。ギャウロフとは違って声で勝負をしない。ボリスの心の中で交差する人間的な苦悩を抉り出すのだ。それが少しも生臭くならないのはクリュイタンスのサポートだろう。この作品に品位を持ち出すのは可笑しいかも知れないが、光をあてられた歴史的恥部が美しいフィクションに仕立て上げられてしまう。なおここではブルガリア出身のクリストフの意向でソフィア合唱団が起用されている。（山田）

第9104番 クリュイタンスの真珠採り



レイラ アンジェリシ（S）
ナディール ルゲイ（T）
ズルガ M.ダン（Br）
ヌーバラット ノグエラ（Bs）
パリ・オペラ・コミック座
オーケストラ&合唱団
クリュイタンス

税込17600円

英EMI／33CX1232-3／2枚組／1954年録音／モノラル／G

「カルメン」と比べて人気は数段劣るが、フランス・オペラとしての魅力はこちらが大きいだろう。舞台は東洋だが、“ふんわり”した音楽は正にフランス的。こんな音楽は他にマスネに求めるしかない。何とんでもこの音楽にこれ以上は考えられない3人の名歌手を揃えたところがこのレコードの決め手になっている。不世出のフランスのプリマ・ドンナ、アンジェリシの動揺を抑えた柔らかな声にそっと寄り添うルゲイの美声。「耳に残る君の歌声」はとろける様に耳をくすぐり、聴きながら夢見心地になってくる。これに匹敵するのは27年後に録音されたA.クラウスだけだろう。そして、75歳と言う高齢まで歌い続けたバリトン、ダンとテノール、ルゲイの有名な二重唱「神殿の奥深く」から生まれるハーモニーの見事さだけでも、このレコードは持つ価値がある。それらすべてがクリュイタンスの自然極まりない、しかも洒落た雰囲気が進められるのだからたまらない。“神殿”は二人の声が粘着質で、ぐいぐい引き合っている。録音が良いことでこれが可能になったのだろう。正にテノールとバリトンの二重唱の極地と言って良いだろう。録音は無いが、この二人で「ドン・カルロとポーザ侯爵の二重唱」を聴きたかった。このレコードを聴くとオペラの楽しみがどんどん広がっていく。クリュイタンスの残したオペラ録音には駄盤がない。この度は二つの歴史的な名盤を紹介できた。（山田）